

平安和文における「語りのハ」の可能性

——源氏物語の例を中心に——

西 田 隆 政

1. はじめに

平安時代の和文において、主文の主格や対格は格助詞の無表示でしめされるのが基本的な形式である。また、係助詞ハ・モや副助詞の類が下接する場合もある¹⁾。一方、金水(1995)で指摘された「語りのハ」とよばれる助詞のハがある。基本的には、古代から中世までには「きわめて稀で」²⁾、中世末頃より使用例があり、明治時代以降にその使用例がふえる傾向にあるとのことである。

基本的な「語りのハ」の成立と変遷については、この考え方がほぼ首肯されるものとおもわれる。ただ、平安和文において、管見の範囲でも、「語りのハ」に通じる例が存在するようである。本稿では、それらの例の当否を検討した上で、「語りのハ」と規定しうる条件についてもかんがえたい。

2. 「語りのハ」と古典作品の問題

金水(1995)では、現代語の助詞ハの用法には、「語りのハ」ともいうべきものがあり、「太郎は重い荷物を軽々と運んだ」³⁾の例をあげる。このような提題のハの例が、「この文は、普通の意味での話し言葉ではない。何か小説の地の文から取り出してきたような印象を受ける」⁴⁾とする。その上で、以下の4点の条件をみたす有題の文のハを「語りのハ」と規定する。

1. 述語は動詞によって構成される。典型的には、「動詞+タ」で終わる文である。
2. 文の内容は、恒常的な属性ではなく、特定の時間・場所に関係づけられた具体的・一回的な出来事である。(cf. 恒常的属性の例「地球は太陽のまわりを回る」)
3. いわゆる主語(ガ格名詞句)、典型的には動作主を指し示す名詞句がハによって提示される。

4. 当該のハにはいわゆる〈対比〉の意味はほとんど含まれない。⁵⁾

さらに、金水(1995)では、以上の定義づけをした上で、このような「語りのハ」が古典作品にきわめて稀であることを指摘して、竹取物語・訓点資料(石山寺本大唐西域記長寛元年点)・覚一本平家物語の例をあげる。ここには竹取物語の例を引用する。

いまはむかし、竹とりのおきなといふもの有りけり。△野山にまじりてたけをとりつゝ、よろづのことにつかひけり。名をば、さかきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もとひかる竹なむひとすぢありける。△あやしがりてよりに見るに、つゝの中ひかりたり。それをみれば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。(中略)竹とりのおきなゆ、竹をとるに、この子を見つけて後に竹とるにふしをへだてゝよごにこがねある竹をみつくる事かさなりぬ。かくておきなゆやう〜ゆたかになり行。このちごゆ、やしなふ程に、すく〜とおほきになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人に成ぬれば、△かみあげなどさうして、かみあげさせ、もきす。⁶⁾

上記の例でも理解されるように、古典作品では、「語りのハ」ではなく、「無助詞による主語名詞句の提示」や「主語の不提示(いわゆる主語の省略)」がもちいられている。これは、古文とされる文語文の一般的な特徴でもあり、この点はほぼ首肯されることであろう。ただ、当然のことながら、竹取物語でもハによる動作主提示の例がないわけではない。

[1] 猶、この女みでは、世にあるまじき心ちのしければ、「天竺にある物ももてこぬ物かは」とおもひめぐらして、石つくりの皇子は、心のしたくある人にて、「天竺に二となき鉢を、百千万里のほどゆきたりとも、いかでとるべき」とおもひて、……(28頁)⁷⁾

[2] くらもちの皇子は、心たばかりある人にて、おほやけには、「筑紫の国に、ゆあみにまからむ」とて、いとま申して、……(33頁)

[3] 右大臣あべのみむらじは、宝ゆたかに、家ひろき人にぞおはしける。(62頁)

[4] 大伴のみゆきの大納言は、わが家にありとある人めしあつめて、のたまはく、「龍の頸に、五色のひかる玉あなり。それをとりてたてまつりたらむ人には、願はむことを叶へむ」とのたまふ。(79頁)

[5] 中納言いそのかみのまろたりの、家につかはる男どものもとに、「つばくらめのすくひたらば、つげよ」とのたまふを、うけたまはりて、

「何の用にかあらん」と申す。(102頁)

(1) から (5) までにあげたのは、かぐや姫に求婚する5人の貴公子が宝物を求める話の冒頭部分である。ここでは、(5) の「中納言いそのかみまろたり」以外でハの用いられているのが注目される。ただし、(3) は述語が存在の意味の「おはす」で、(1) と (2) も「心のしたくある人にて」と「心たばかりある人にて」と状態表現にかかっているとも理解される。その中で(4) は述語が動詞「めしあつむ」「のたまふ」であり、「語りのハ」の可能性もかんがえられそうである。しかし、これらの例は、5人の貴公子の求婚譚を対比的にならべているとみるのが妥当であろう。その点では、規定の4から、「語りのハ」ではないことになる。とすると、平安和文での主格を示すハは、対比的に動作主体の行為を表現している場合にかぎられ、現代語で「語りのハ」がもちいられるような場合は、無助詞か主語の不提示であるということになろう。

しかし、複数の人物が同時に登場することと、対比的にしめされていることが、同列にかんがえられるかどうかには、微妙な点がある。金水(1995)のあげた現代語の例でも「メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言で首肯し、メロスをひしと抱きしめた。……セリヌンティウスは、縄を打たれた。メロスは、すぐに出発した」(「はしれメロス」)⁸⁾のような場合、二人の人物が同時に登場しているが、そのことだけで対比的にしめられている例とはいえないであろう。古文では、無助詞の例と助詞ハでしめされる例とがともに使用されるので、その点をかんがえるにも有効であるとおもわれる。

以上の点をふまえて、以下では、平安和文での「語りのハ」の可能性について、多様な語りのバリエーションのある、源氏物語の例を中心に検討していくことにしたい。⁹⁾

3. 源氏物語における無助詞の主格

まず、源氏物語での無助詞と主語不提示の例と、その中にみられる典型的な対比のハの例をあげる。

(6) 齋院は¹⁰⁾ 御服にておりゐたまにきかし。おとどゆ、例のおぼしめつることたえぬ御くせにて、御とぶらひなどいとしげうきこえたまふ。宮ゆ、わづらはしかりしことをおぼせば、御かへりもうちとけてきこえ

たまはず。△いとくちをしとおぼしわたる。長月になりて、△桃園の宮にわたりたまひぬるをききて、女五の宮のそこにおはすれば、△そなたの御とぶらひにことづけてまうでたまふ。故院のこの御子たちをば心ことにやむごとなくおもひきこえたまへりしかば、△今もしたしくつぎつきにきこえかはしたまふめり。△おなじ寝殿の西東にぞすみたまひける。ほどもなくあれにけるこちして、あはれにけはひしめやかなり。宮 ϕ 、対面したまひて、御物語きこえたまふ。△いとふるめきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしくふりがたき御ありさまなるを、もてはなれ、声ふつつかにこちこちしくおぼえたまへるもさるかたなり。(「朝顔」639頁)

(6) は、朝顔の巻冒頭で、光源氏が齋院を辞した朝顔姫君に対して懸想心をいだいている部分である。光源氏と朝顔姫君が最初は無助詞でしめされ、その後は主語の不提示となる。その中で従属節の主格については「女五の宮の」「故院の」と助詞ノでしめされる。女五の宮も「宮 ϕ 」と主文では無助詞となる。竹取物語の例と同様であり、複数の人物が登場する場合でも、無助詞によりしめされる。

その中で、「故大殿宮は」にハのもちいられるのが注意される。ただ、この例は、女五の宮が「ふるめきたる」様子であるのに対して、光源氏の亡妻葵上の母である、故大殿が「あらまほしくふりがたき」であるのを、光源氏があらためて想起した、典型的な対比の例とかがえられる。基本的な話の進行は、無助詞か主語の不提示で、ハの使用は対比にかざられるという原則をみることができるのである。

もう一例、同様の例をあげる。ただ、この例は、話の進行の説明というよりは情景の描写ともいえる例である。

(7) 池の魚を、左少将 ϕ とり、蔵人所の鷹飼の北野に狩つかうまつれる鳥ひとつがひを、右の少将 ϕ ささげて、寝殿の東より御前にいでて、御階の左右にひぎをつきて奏す。おほきおとど ϕ おほせごとたまひて、調じて御膳にまゐる。△親王たち、上達部などの御まうけも、めづらしきさまに、つねのことどもをかへて、つかうまつらせたまへり。みな御糸ひになりて、くれかかるとに、楽所の人めす。わざとの大楽にはあらず、なまめかしきほどに、殿上のわらわべ ϕ まひつかうまつる。△朱雀院の紅葉の賀、例のふることおぼしいでらる。△賀王恩といふものを奏するほどに、おほきおとどの御おとこの十ばかりなる ϕ 、せちにおも

しろうまふ。内裏の帝ゆ、御衣ぬぎてたまふ。おほきおとどゆ、おりて舞踏したまふ。主の院ゆ、菊をおらせたまひて、青海波のをりをおぼし
いづ。(「藤裏集」1016～1017頁)

〔7〕は、少女の巻での朱雀院行幸の例である。最初に左少将と右少将が、それぞれ、無助詞でしめされる。さらに「おほきおとど」「殿上のわらはべ」「おほきおとどの御おとこの十ばかりなる」「内裏の帝」「主の院」と、いずれも無助詞であり、動作主体が自明の場合は主語不提示である。

この〔7〕が〔6〕と相違する点は、〔6〕があらたな話の進行を説明しているのに対して、〔7〕が話の進行というよりはそこでの宴の様子自体を描写しているということである。ただ、両者ともに、無助詞と主語不提示という、「語りのハ」をもちいない点では共通する。これは、金水(1995)でのべるように、いわゆる古文の一般的な傾向なのか、それとも、他の見方のできる可能性はないのかという点について、さらに、源氏物語の例で検討する。

4. 源氏物語における「語りのハ」

まず、一連の文の中で、ハの多用されている例からみていく。

〔8〕源氏中将は¹¹⁾、青海波をぞまひたまひける。片手には、大殿の頭中将ゆ、かたち用意人にはことなるを、たちならびては、なほ花のかたはらの深山木なり。入り方の目かげさやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、おなじまひのあしぶみおももち、世にみえぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむときこゆ。おもしろくあはれなるに、帝ゆ涙をのごひたまひ、上達部親王たちも、みななきたまひぬ。詠はてて、袖うちなほしたまへるに、まちとりたる楽のにぎははしきに、△顔の色あひまさりて、つねよりもひかるとみえたまふ。春宮女御ゆ、かくめでたきにつけても、ただならずおぼして、「神など空にめでつべきかたちかな。うたてゆゆし」とのたまふを、わかき女房などは、心うしと耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたくみえましとおぼすに、夢の心地なむしたまひける。宮は、やがて御とのみなりけり。(「紅葉賀」237頁)

紅葉賀の巻の冒頭で、試楽の際に光源氏のまう姿が話題となる部分である。「源氏中将は」は、次の「片手には大殿の頭中将」とあるのと対比されているともおもわれるが、「源氏中将は」と「片手には」との対比となると、後

者は補足的のべられている部分でもあり、先の〔6〕での「故大殿の宮は」と比較すると、対比性がよわいようである。

以下、無助詞と主語不提示の例がつづき、「春宮女御」が無助詞でしめされる。その発言に対して、「わかき女房などは」縁起でもないとおもい、「藤壺は」夢の心地でみている。さらに、藤壺の「宮は」そのままお休みになるとつづく。この一連の部分では、「春宮女御」以外はハがもちいられる。いずれも、光源氏の舞姿をみての女性たちの反応という点で、この方はこうでもう一方はのように、対比的に理解することも可能であろう。ただ、「藤壺は」については、おなじ反応であるにしても、評価ではなく自分自身の心情面からの反応であり、「わかき女房たちは」との対比性はうすいとおもわれる。

つぎに、若菜上の巻、六条院の蹴鞠で、女三の宮が夕霧と柏木に姿をみせってしまった直後の例をあげる。

〔9〕大将ø¹²⁾、いとかたはらいたけれど、はひよらむも、なかなかいとかるがるしければ、ただ心をえさせて、うちしはぶきたまへるにぞ、△やをらひきいりたまふ。さるは、わがこちにも、いとあかぬこちしたまへど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらずうちなげかる。ましてさばかり心をしめたる衛門督は、胸ふとふたがりて、誰ばかりにかはあらむ、こころの中にしるき桂姿よりも人にまぎるべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりておぼゆ。△さらぬ顔にもてなしたれど、まさに目とどめじやと、大将はいとほしくおぼさる。……衛門督は、いといたくおもひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。大将は、心しりに、あやしかりつる御簾のすき影おもひいづることやあらむと、おもひたまふ。(「若菜上」1115~1116頁)

女三宮のあまりにあらわな様子に、夕霧が咳ばらいをして、そのことをしらせると、女三宮はようやく奥にはいっていく。その姿をみた柏木の「衛門督は」すっかり心がひかれてしまう。柏木の様子に気づいた夕霧の「大将は」女三宮を気の毒におもう。さらに、蹴鞠が一段落して休憩の際にも、「衛門督は」ぼんやりものおもいにふける。「大将は」その様子からさもあらんと想像する。以上のように、ここでは、夕霧と柏木の両者の反応をのべており、対比的な構成になっていると理解される。

しかし、二人の人物が関係づけられてかたられているというだけで、対比的であり、ハがもちいられるのではないとおもわれる。それは、〔6〕の例でも、光源氏と朝顔姫君の両者の状況のべられるのに、ハがもちいられてい

ないということがあるからである。

〔6〕では、光源氏と朝顔姫君、さらに光源氏と女五の宮とが、登場している。光源氏と朝顔姫君は長年手紙による交流のある関係であり、光源氏と女五の宮は桃園の宮で対面している。これらは、ハをもちいて対比的にもなりうる対象であるが、この部分ではそうはならず、並列的な叙述ともいえるかたちになっている。逆にいえば、物語における事柄を順次のべていく場合には、無助詞になるともおもわれる。これは、〔7〕の儀式の例がより典型的である。儀式においては、その次第が人物の行為ごとにのべられる。たとえば、最初の部分に左少将と右少将が登場するが、彼らも順番にでてくるだけであり、対比的にしめされるわけではない。そして、最終的に儀式はすばらしいものであったとなる。ことさらに、そのときの登場人物の意識がどうであったなどは、物語の中にあられてこないのである。

それに対して、〔8〕の紅葉賀の場合は、試楽の舞であっても、それへの人々の評価や心情がでている点で、ハをもちいて、各人物の反応に着目しつづけることにもなる。〔9〕でも、夕霧と拍木がそれぞれ何をしたという段階にはとどまらず、彼らの意識や心情もふくめたとより登場人物に密着した叙述にまでなっているとさえいえる。無助詞による場合との相違点は、物語の中での、当該部分の叙述が事柄の進行をかたる部分か、それとも、さらに登場人物の心情などにかかわってより細密に叙述している部分なのか、一つの基準ともなるようなのである。

つづいて、単独でもちいられるハの使用例をみることにする。

〔10〕上は、夢のやうにいみじきことをきかせたまひて、いろいろにおぼしみだれさせたまふ。（「薄雲」621頁）

〔11〕上は、王命婦にくはしきことは、とはまほしうおぼしめせど、「今さらに、しかしのびたまひけむことしりにけりと、かの人にもおもはれじ。ただ大臣に、いかでほのめかしとひきこえて、さきざきのかかることの例はありけりやととひきかむ」とおぼせど、さらについてなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御覧するに、もろこしには、あらはれてもしのびてもみだりがはしきこととおほかりけり。（「薄雲」623頁）

薄雲の巻では、藤壺と太政大臣の死後、冷泉帝が夜居の僧より自分が光源氏の子であるという出生の秘密をきく。〔10〕は、その直後の例で、「上は」おもいなやむ。さらに、光源氏にそれとなく讓位をほのめかすと、はっきり

と否定されてしまい、それ以上に出生の秘密をきくこともできない。その後、〔11〕で、藤壺と光源氏のとりつき役であった王命婦にたずねようともおもうが、それもできずにとつづく。これらのハは、対比的に何かをしめしているというよりも、その時点で、「上は」どのようにおもしろい、行動したかを、しめしている。それゆえに、〔10〕〔11〕のハは、対比性よりも、題目的な要素のあるものとかんがえられるのである。

また、この巻での、冷泉帝は、次の資料〔12〕のように登場し、さらに〔13〕でその心話と会話の主体としてしめされる。

〔12〕 御わざなどもすぎて、ことどもしづまりて、帝の心ほそくおぼしたり。(「薄雲」618頁)

〔13〕 上ゆ、「なにごとならむ。この世にうらみのこるべくおもふことやあらむ。法師は聖といへども、あるまじきよこさまのそねみふかく、うたてあるものを」とおぼして、「いはけなかりしときより、へだておもふことなきを、そこにはかくしのびのこされたることありけるをなむ、つらくおもひぬる」とのたまはすれば、……(「薄雲」619頁)

〔12〕では、藤壺の死後の法要などがおわり、冷泉帝は不安におもっているとある。そこで、藤壺の代からご祈禱僧として出入りしていた僧都を、夜居の加持に参上させる。その僧が御前に人のすくないおりに、口ごもることがあったので、〔13〕のように、冷泉帝は、僧都が執着の身となるのを心配におもしろい、隠しごとをされてはうらみにおもうと口にしている。〔12〕〔13〕ともに、無助詞であり、ここでは、それらの行為の主体となるのが、冷泉帝であるのをしめすのみである。

それに対して、〔10〕〔11〕では、物語の進行の中で、秘密をしった冷泉帝に話の焦点がしぼられており、さらには、冷泉帝の心情や行為自体が物語の中で、とりわけ注目に値するものとなっている。これらはその結果として、ハによってしめされているとおもわれる。無助詞の場合とは、おなじ物語地の文の語りでも、そこに相違点がある。

以上みてきたように、ハが連続的にもちいられる場合も、ハが単独でもちいられる場合も、ともに物語の中で叙述がより細密になり、ひいては、ハによってしめされる人物が物語の叙述での焦点となる例になっているようである。これは、いわゆる題目のハにも通じるうるもので、その点からすると、源氏物語の地の文には、対比的なハだけでなく、「語りのハ」ともみなしうる例が存在することにもなるのである。

5. おわりに

今回の検討では、源氏物語中の助詞ハには対比的な使用例だけでなく、語りのハにも通じうる例のあることを指摘した。勿論、これらの例が現代語の「語りのハ」とまったくおなじものとはかんがえにくい。おなじ地の文での語りでも、無助詞でしめす例の方が、事柄をつみかさねて話の進行をおこなっている点で、現代語の「語りのハ」によりちかい使用例である。

ただ、ここでかんがえられるのは、「語りのハ」と、それに古文で対応する形式である無助詞や主語不提示の例を、もうすこし細部の点まで規定しておく必要があるのではないかということである。金水(1995)では、4つの条件が規定されていたが、それにつけくわえて、

5. 当該の文は、小説などの地の文中でも、事柄をつみかさねて話の進行がおこなわれる、説明や描写の部分におおくみられる。

のようなものも可能性があるのではなからうか。先の4つの条件と比較すると、不明瞭な点がこの規定であるが、「語りのハ」やその古文での対応する例は、ある程度もちいられる部分がかぎられているようにもかんがえるのである。また、源氏物語のような多様な語りの事例のある作品の場合は、無助詞や主語不提示の例だけでなく、「語りのハ」にも通じる助詞ハの使用例が存在するのである。

「語りのハ」の問題を歴史的にかんがえる場合、通史的な視点が不可欠であり、また、無助詞によってしめされる、そのほかの例についても注意せねばならないのであるが、今回は、平安和文での「語りのハ」の可能性にしばって検討した。まだ説明しきれていない点がおおいのであるが、それらについては今後の課題にしたいとおもう。

【注】

※本稿は、文法史研究会(2001年10月2日、大手前大学)での発表「主格の無表示をめぐる一源氏物語の事例を中心にして一」をもとに、その一部分を、構想をあらためて稿としたものである。席上、ご教示いただいた、皆様には、あつく御礼もうしあげる。

- 1) 金水(1996)では、「平安時代以前の和文系文献(話し言葉に近い)や和歌では、主文の主格名詞句は、基本的に無助詞か、「は」「も」などの係助詞、副助詞を伴うのみで、格助詞は付けない」とする。

- 2) 金水 (1995) 74頁。また、用例をあげて、「『エソポのハプラス』では語りのハが発生していることが確認できる」(78頁)とする。
- 3) 益岡・田窪 (1992) 145頁にあげられた例文。
- 4) 金水 (1995) 71頁～72頁。
- 5) 金水 (1995) 72頁。
- 6) この部分の引用は、金水 (1995) 74頁による。以下の引用例もふくめて、無助詞を ϕ 、主語の不提示を Δ でしめす。
- 7) 竹取物語の引用は、上坂 (1980) による。適宜、かなづかいをあらため、清濁をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。
- 8) 金水 (1995) 72頁より、一部省略して引用。
- 9) 源氏物語の調査・引用は、池田 (1953) による。適宜、かなづかいをあらため、清濁をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。なお、注意すべき校異のある場合は注に記す。諸本に異同のない場合は注記しない。
- 10) 巻冒頭文「齋院は」のハについての検討は、ここでは保留する。
- 11) 底本 (大島本) の「源氏の中將は」が、青表紙本の横山本・榊原家本・池田本、河内本の諸本、別本の御物本で、助詞ハのない本文である。
- 12) 底本 (大島本) の「大將 ϕ 」が、別本の阿里莫本では「大將は」となる。

<参考文献>

- 青木怜子 1992 『現代語助詞「は」の構文論的研究』(笠間書院)
- 池田亀鑑 1953 『源氏物語大成・校異篇』(中央公論社) — 調査は9版 (1980) による
- 上坂信男 1980 『九本対照竹取翁物語語彙索引・本文編』(笠間書院)
- 尾上圭介 1981 「「は」係助詞性と表現的機能」(『国語と国文学』58—5)
- 金水 敏 1993 『古典語のヲについて』(仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版)
- 1995 「語りのハ」に関する覚書。(益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版)
- 1996 「歴史的にみた「格助詞」の機能」(日本認知学会第13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」資料)
- 野田尚史 1996 『「は」と「が」』(くろしお出版)
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法—改訂版—』(くろしお出版)